

# 古典文学ゼミが社会参加。 京都府からのプロジェクトで おとなしい学生達が発信することを学んだ

日本文学のゼミで、

どのように社会人基礎力を育てることができる？

学びの場で「社会人基礎力」を育てることは、実践型学習になじみやすいいわば実学型の分野では、テーマや方法はさまざまに考えられますが、学究を深めることに重点を置く分野では、学生は教員の教えに従う形の学びが中心になります。ここで取り上げる京都産業大学文化学部の小林一彦教授の取り組みは、一見すれば実学とは最も遠く感じられる古典文学を題材としたゼミ活動の中で、知識の深化と「社会人基礎力」の育成を実現した例です。

小林先生は、以前から文化学部のゼミの授業で、多様な見方と「足腰の強い教養」を身に付けるために、いまに息づく日本文化のルーツを考えさせるために、時には新聞を教材に現在の出来事や背景・影響を考えさせ、学生達が世界や社会に目を向けるよう促してきました。そして、それが日本独自のものか否か、古典作品などを媒介にゼミで議論してきました。学生達は内容を深めるためアンケート調査やフィールドワークにも出て行きました。しかし作業が一人ひとりバラバラで、互いに名前も覚えにくいことすらあることに、限界を感じていました。そのため平成21年度は「京都の地名を調べて、関連する歌の歴史を調べる」ことを課題にし、ゼミ全員で取り組もうとしました。ところが、ゼミ応募者が6人しか集まらず、作業量に比べて人数が少なすぎるという事態になってしまいました。

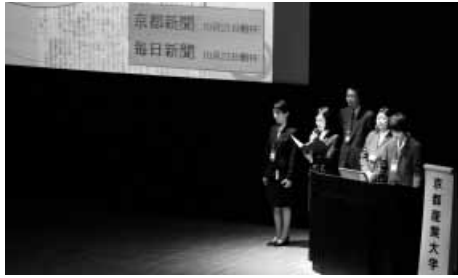
そのようなとき、小林先生に対して、京都府から、平城遷都1300年を翌年に控え、万葉集に触れながら奈良と京都の間に広がる山城地域の魅力を紹介するリーフレットを作れないか、という依頼がありました。ゼミのテーマとちょうど重なるため、学生にやらせてみたいと、この企画を受け入れ、万葉集に詠まれた場所や歌碑の紹介、そして学生達が自分達の言葉で万葉集の歌の解釈を載せるリーフレットの制作がスタートしました。

京都産業大学は、大学全体として、「社会人基礎力」育成に精力的に取り組んでいます。小林先生も、文系の学問の観点で、世界や社会に目を向けるようになってきたので、社会への接合と考えたとき、「社会人基礎力」育成を導入することは、自然な発想でした。そして、この活動を通してどちらか

学生たちが制作したリーフレット「お茶と万葉の旅」



画像提供 京都産業大学文化学部



「社会人基礎力育成グランプリ」決勝大会で準グランプリ  
(平成22年3月5日)

と云えば内気なゼミ生達に「社会人基礎力」を意識させ、刺激を与えるきっかけになれば、とも考えたのです。

### チームで取り組むことで、学びを深めることができた

今までの国文学の授業やゼミでは、一人で調べたり解釈したりすることが中心だった学生達は、当初は戸惑いがちでしたが、京都府の方に伴われて山城を訪問し、きちんとしたガイドを受けることができたことで、初めて山城の素晴らしさと、それを的確に発信することの大切さを体感するようになりました。これを機会に、学生達の活動に熱が入り始めました。

学生達の作業は、万葉集から山城を詠んだ約100首をピックアップし、また15ある歌碑をめぐって写真撮影を行い、それぞれの歌を研究することでした。万葉集の解釈はまだ定まっていないものがあるため、訳本との丁寧な照合が必要です。学生達は自分達の知識をフル回転させて、解釈に取り組み、議論を重ねました。さらに、リーフレットに掲載する写真撮影や、印刷会社との交渉など、夏休みも使って作業を続け、3カ月かけて10月にリーフレットが完成しました。5000部印刷されて市役所、観光協会、沿線の駅やホテルに置かれたリーフレットは大好評で、すぐに品切れになりました。活動はマスコミに大きく取り上げられ、「日本文学風土学会」全国大会で展示ブースを開設したり、中国からの交換留学生の協力を得てリーフレットを翻訳したりと、さまざまな形の発信が続きました。

当初は、ディスカッションをしようとしても誰からも意見が出なかったり、連絡用のメーリングリストもほとんど機能しなかったり、という学生達でしたが、この活動を通して他のメンバーと話し合い、その中で別の視点や考えを理解できるようになったと言います。また、歌の解釈などでも、皆で議論をするうちに新たな視点に気付き、本を読んでも理解できなかったことが、自分なりの意見を持つようになりました。そのことから、チームで取り組むことの重要性を改めて知ることになりました。そして、万葉集を知らない人にもわかりやすい解釈を自分達の言葉で作りに上げることは、学問研究で必要な「発信力」を鍛えることにもなりました。この経験を経済産業省主催の「社会人基礎力育成グランプリ」出場に向けた学内選考会で発表し、京都産業大学の代表としてグランプリに参加、決勝大会で準グランプリを獲得しました。実社会との結び付きが薄いと思われる学問分野であっても、ゼミの中に閉じることなく外への発信の場を作ることで、学生の学びへの意識を変えたとともに、自分達の学びを世の中の人に説明し、改めてその価値を知ることにつながった優れた例です。